

氏名の選好は自尊心の間接的な測定法として有効か？

—諸特性との関連に基づいた妥当性の検討—

澤海 崇文^{1,4} 藤井 勉^{2,4} 相川 充^{3,4}

¹ 神奈川大学人間科学部 ² 長崎大学大学教育イノベーションセンター

³ 筑波大学人間系 ⁴ 教育テスト研究センター

自尊心の測定に関しては従来から多くの研究が実施されてきた。最もシンプルな自己報告法だけでなく、最近では種々の間接的な測定法も開発されている。本研究は、自身の氏名の選好が自尊心を間接的に測定するという研究 (Gebauer, Riketta, Broemer, & Maio, 2008) に基づき、その追試を日本人に対して行った。49名の日本人が研究に参加し、氏名の選好の他、自尊心、主観的幸福感等の特性が測定された。相関分析の結果、氏名の選好は主観的幸福感と正の相関を示し、先行研究の結果を再現できたものの、自尊心との有意な相関は見られず、先行研究とは異なるパターンを示した。今後の研究では、氏名の選好が日本においても自尊心を測定するといえるのか、他の間接的な方法で測定された自尊心との関連も併せて検討する必要がある。

キーワード：氏名の選好，自尊心，妥当性，主観的幸福感，社会的望ましさ

1. はじめに

心理学においては自尊心という心理的構成概念が昔から研究されてきた。自尊心とは、自己に対する肯定的または否定的な態度のことであり (Rosenberg, 1965)、種々の測定法が提案され使用されてきた。これまで頻繁に使用されているのは、質問紙を用いた自己報告による測定法であり、代表的な尺度としては Rosenberg (1965) の作成した 10 項目の自尊心尺度が挙げられ、本邦においてはそれを翻訳した山本・松井・山成 (1982) の尺度が多くの研究で用いられている。この尺度は、「自分に対して肯定的である」のような項目に対し、回答者が自身にどの程度あてはまるかを選択する形式で回答を求めるものである。

上記のような自己報告の測定法の欠点は、回答者は自身の回答を意図的に歪めることができる点、すなわち回答者が生活する社会環境で望ましいと思われる自己像を呈示できることが挙げられる (Edwards, 1957)。この欠点に対し、自尊心に関する項目を直接的に回答者に尋ねるのではなく、自尊心を間接的に測定する方法が開発されてきた。例えば、英語のアルファベットに対し好みを回答させ、自身のイニシャルへの選好の程度を自尊心の指標とする Name Letter Task (NLT)、画面上に呈示された刺激語に対するカテゴリ分けを通して、「自己」とポジティブな属性の連合の強さを自尊心の指標とする Implicit Association Test (IAT) 等である。しかし、これらの得点が互いに関連しないこと、つまり同じ概念を反映すると考えられる得点間の相関が低いという問題が指摘されている (Bosson, Swann, & Pennebaker, 2000)。こうした状況に対し最近では、自分の氏名に対する好みを測定するという、自尊心の間接的な測定法が新たに提唱された (Gebauer, Riketta, Broemer, & Maio, 2008)。

Gebauer et al. (2008) では 6 つの研究が行われ、その測度の妥当性が示されている。具体的には、自身の氏名の選好が (a) NLT 得点や IAT 得点と正相関 (b) 自己報告により測定された自尊心と正相関 (c) 主観的幸福感と正相関 (d) 抑うつ傾向と負相関 (e) 社会的望ましさ反応傾向のうち印象操作と無相関、自己欺瞞と正相関を示したことが報告されており、

さらに 4 週間から 6 週間の間隔を置いた再検査信頼性も $r = .85$ と十分に高かった。

2. 目的

Gebauer et al. (2008) も述べているように、彼らは個人主義が優勢な文化においてのみ氏名尺度の妥当性の検討を行っており、日本のような集団主義が優勢な文化においても妥当性を示すことが必要である。そこで本研究では、自身の氏名の選好が自尊心の測定法として妥当であるかを他の特性との関連を基準とし、日本人を対象に検証する。先行研究に基づき、氏名の選好は自己報告により測定された自尊心と正の相関、主観的幸福感と正の相関、自己欺瞞と正の相関を示すが、印象操作とは相関が見られないことが予測される。

3. 方法

3.1 回答者 18 歳以上の日本人 49 名 (男性 27 名, 女性 22 名, 平均年齢 23.69 歳) が調査に参加した。

3.2 材料 本研究では以下の 4 つの尺度を用いた。1 つ目は氏名の選好尺度で、自身の苗字, 名前, フルネームがそれぞれどのくらい好きかを 9 件法で尋ねた (1: とても嫌い—9: とても好き)。2 つ目は 2 項目より成る自尊感情尺度で (箕浦・成田, 2013), 自尊心の指標として用い、各項目に対して自身がどのくらい当てはまるかを 5 件法で尋ねた (1: 全く当てはまらない—5: 非常に当てはまる)。3 つ目は主観的幸福感の指標として、5 項目より構成される人生満足感尺度 (Diener, Emmons, Larsen, & Griffin, 1985) を用いた。4 つ目は社会的望ましき反応傾向の指標として、印象操作および自己欺瞞の 2 下位尺度から成るバランス型社会的望ましき反応尺度 (谷, 2008) より、各下位尺度において先行研究で因子負荷の高かった 5 項目ずつを選定して使用した。主観的幸福感・社会的望ましき反応尺度はともに、自尊感情尺度と同様の 5 件法で尋ねた。他にも複数の尺度が含まれていたが、本稿では報告しない。これらの尺度を Inquisit Web License を用いて 1 つのプログラムにまとめ、インターネット上で調査を実施できるようにセッティングを行った。

3.3 手続き 調査への参加希望者に調査概要と実施用 URL をメールにて送付し、回答者は都合の良い時間に URL にアクセスし、プログラムを実行して調査に参加した。

4. 結果

4.1 氏名尺度の様相 表 1 に 3 種類の氏名尺度の記述統計量を記載した。各尺度の平均値に対して、理論的中央値 (5) より離れているかを確認するために対応のある t 検定を行ったところ、どの尺度の平均値も有意に 5 点より高いという結果が得られた。

表 1: 各氏名尺度の平均値および標準偏差

	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>t</i>	<i>p</i>
苗字選好	5.76	2.08	2.55	.014
名前選好	6.80	1.81	6.93	< .001
フルネーム選好	6.29	1.89	4.75	< .001

(注) t および p は理論的中央値 (5) から離れているかどうかの t 検定に基づく統計量

4.2 諸特性との関連 次に氏名尺度と各種特性との関連を検討した。氏名の選好に関しては 3 種類の選好を平均した得点を使用して、以下の報告を行う。各尺度の信頼性係数を算出したところ、すべての尺度は一定の内的一貫性を有すると判断したため、各尺度内で相加平均を算出した。表 2 に各尺度得点の記述統計量および尺度間の相関行列を記載した。

氏名の選好は、人生満足感尺度により測定された主観的幸福感との有意な正の相関が確認されたが、自己報告による自尊心とは有意な相関が得られず、社会的望ましき反応のうちの印象操作および自己欺瞞とも有意な相関は観測されなかった。

表 2: 各尺度の記述統計量および相関行列

	1	2	3	4	5	<i>M</i>	<i>SD</i>	α
1. 氏名選好	—	.09	.38**	-.04	.01	6.28	1.68	.84
2. 自尊心		—	.54**	.40**	.06	3.31	0.89	.71
3. 幸福感			—	.53**	.15	2.83	0.82	.84
4. 印象操作				—	.10	2.14	0.73	.76
5. 自己欺瞞					—	2.87	0.66	.63

(注) ** $p < .01$

5. 考察

本研究は、Gebauer et al. (2008) の一連の実験結果について、日本でも再現されるか否かを検討するため、彼らの研究の一部を追試した。相関分析の結果、氏名の選好は主観的幸福感と正の相関を示し、印象操作との相関は有意ではなく、先行研究と一致したパターンが得られた。しかし、氏名の選好は自尊心および自己欺瞞とは有意な相関を示さず、先行研究と異なるパターンも見られた。したがって、結果は部分的にのみ再現された。

一部、先行研究とは一致しなかったものの、氏名の選好を問うという間接的な測定法は、他の間接的な測定法 (e.g., NLT や IAT) に比べ、回答者側の負担が軽く、実施時間も短いため、非常に有用な手法であるといえる。このように簡便な測定法の妥当性を明らかにするためには、今後も詳細な議論を要する。例えば、本研究で用いた自尊心を測定する尺度は Gebauer et al. (2008) で用いられたものとは異なっていた。今後の研究では、基準となる特性を測定する手法についても工夫が必要であろう。また、本研究では他の間接的測定法との関連を検討しておらず、この観点からの妥当性の議論も必要であろう。

参考文献

- Bosson, J. K., Swann, W. B. Jr., & Pennebaker, J. W. (2000) Stalking the perfect measure of implicit self-esteem: The blind men and the elephant revisited? *Journal of Personality and Social Psychology*, 79:631-643
- Diener, E., Emmons, R. A., Larsen, R. J., & Griffin, S. (1985) The Satisfaction With Life Scale. *Journal of Personality Assessment*, 49:71-75
- Edwards, A. L. (1957) *The social desirability variable in personality assessment and research*. New York, NY: Dryden Press
- Gebauer, J. E., Riketta, M., Broemer, P., & Maio, G. R. (2008) “How much do you like your name?” An implicit measure of global self-esteem. *Journal of Experimental Social Psychology*, 44:1346-1354
- 箕浦有希久・成田健一 (2013) 2項目自尊感情尺度の開発および信頼性・妥当性の検討 感情心理学研究, 21:37-45
- Rosenberg, M. (1965) *Society and the adolescent self-image*. Princeton, NJ: Princeton University Press
- 谷 伊織 (2008) バランス型社会的望ましき反応尺度日本語版 (BIDR-J) の作成と信頼性・妥当性の検討 パーソナリティ研究, 17:18-28
- 山本真理子・松井 豊・山成由紀子 (1982) 認知された自己の諸側面の構造 教育心理学研究, 30:64-68